

(様式 3)

農業研究成果情報

No. 791 (平成 29 年 5 月) 分類コード 02-09 熊本県農林水産部

温州ミカン「熊本 EC11」の高接ぎ樹における枝別着果法による着花量確保

「熊本 EC11」の高接ぎ樹における枝別着果法は、慣行着果に比べて同等以上の収量が確保でき、翌年の着花も安定している。

農業研究センター果樹研究所常緑果樹研究室 (担当者: 三原崇史)

研究のねらい

12 月出荷用新系統温州ミカン「熊本 EC11」の品種特性については、既に農業の新しい技術 (2014 年) として発表しており、今後の普及を促進するため、早期成園化と高品質果実安定生産技術を確立する必要がある。

そこで、高接ぎ樹における果実品質および翌年の着花量を確保するための枝別摘果と群状着果の組み合わせ (以下、枝別着果) による着果法を検討する。

研究の成果

1. 翌年の着花数は、枝別着果を行うことで 2 カ年の変動が小さく安定した着花が確保できる (図 1)。
2.  $1\text{ m}^3$  当たりの収量は、枝別着果が慣行着果に比べ多い (表 1)。
3. 果実階級は、枝別着果が慣行着果に比べ、適正階級 (S, M, L 玉) の割合が 1 割程度高くなる (図 2)。
4. 枝別着果は、慣行着果に比べ浮皮発生程度を軽減できる (図 3)。
5. 果実品質は処理間に差はみられない (データ略)。

普及上の留意点

1. 枝別着果は 1 円玉大の枝ごとに摘果枝: 着果枝 = 1 : 2 の割合で設定した。枝別着果は群状着果とし、9 月中旬に仕上げ摘果により小玉果を除去した。なお、摘果枝は粗摘果時に全摘果した。
2. 2013 年、2015 年における「白川」中間台高接ぎ 3、5 年生の結果であり、2 カ年で調査樹は異なる (2014 年は未調査)。
3. 摘果する枝は、新梢が多く発生している枝を選定する。
4. 仕上げ摘果が遅れると小玉果が多くなることが懸念されるため、遅れないよう実施する。



図1 着果方法の違いによる「熊本 EC11」の翌年の着花  
注) 葉花比：総花数/旧葉数

表1 着果方法の違いによる「熊本 EC11」の樹容積および収量

調査年	着果方法	樹容積 m <sup>3</sup>	収量	
			1樹当たり kg	1m <sup>3</sup> 当たり kg
2013	枝別着果	11.9	59.9	5.0
	慣行着果	16.5	70.4	4.3
2015	枝別着果	13.5	49.9	4.1
	慣行着果	12.6	43.0	3.3

注1) 粗摘果：2013年7月25日、2015年7月17日

仕上げ摘果：2013年9月19日、2015年9月17日

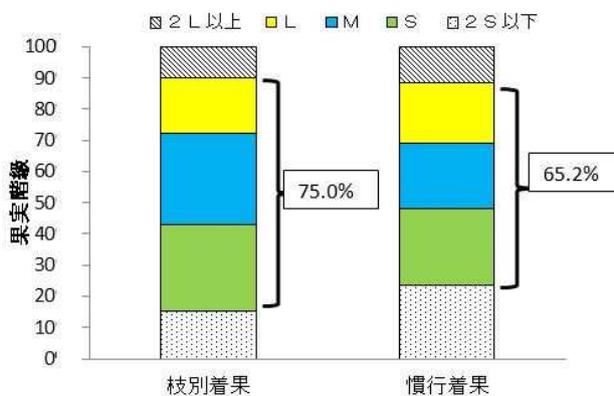


図2 着果方法の違いによる「熊本 EC11」の果実階級割合

注) 2013年、2015年の2ヵ年平均

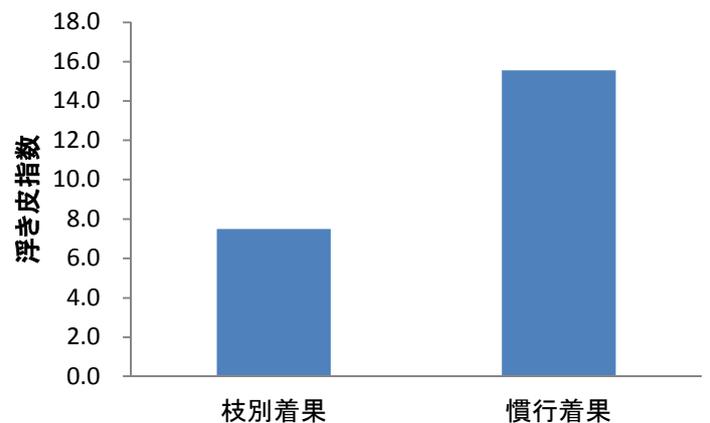


図3 着果方法の違いによる「熊本 EC11」の浮き皮程度 (2015年)

注) 浮き皮指数 = { (無(0) + 微(1) + 軽(2) + 中(3) + 甚(4)) / (調査果数 × 4) } × 100

収穫日 2015年11月20日

調査日 2015年11月24日